

7 川原汎とその著『内科彙講—神経 係統篇』——刊行百年を記念して——

高橋 昭

川原汎^{ひろし}は一八九七年(明治三〇年)に『内科彙講——神経係統篇』を上梓した。本年は刊行一〇〇年の記念すべき年に当たる。

『内科彙講』は全四冊として企画されたが、その最初の「神経係統篇」のみが発行され、未完に終わった。本書は日本で最初の神経病学書である。四百六十余頁、菊判、東京半田屋医籍商店発行、正価は一円七十銭であった。本日は、愛知医学校一等教諭であった川原が同校での講義録を改訂し執筆したものである。その構成は、局処症候の概論に始まり、髄膜、脳脊髄、末梢神経、筋肉の器質的疾患、片頭痛・てんかんなどの機能的疾患、さらに内分泌疾患をも含み、臨床症候、病因、病理、診断、治療が詳述されている。英独仏の多数の成書や文献を精読

して纏められたものであり、疾病記載の歴史、英独仏羅ほか西欧の学術用語の紹介、その邦訳についての注釈、自験症例の記載、当時までに報告された本邦文献目録も含まれている。

本書は現存三冊が確認できた。公的図書館では国立国会図書館に所蔵されるのみで、他の二冊は個人蔵である。発行はすべて同一の「明治三十年六月十四日」とされているが、四百六十四頁のものとは五頁多い四百六十九頁のものがあり、第二版までは発行されたように思われる。

著者の川原汎^{ひろし}は、一八五八年(安政五年)二月二十二日に、父忠徳の長男として出生した。曾祖父は幕末期の俳人として名高い川原悠々^{ゆうゆう}(一七七五—一八五七)である。初等教育を大村の「五教館^{ごこうかん}」で受け、一八七一年(明治四年)藩費生として長崎医学校に進み、一八七四年(明治七年)征台の役との関連で同校が閉校された折に東京医学校へ転入学した。東京医学校は東京大学となり、一八八三年(明治十六年)に東京大学を卒業、医学士の学位を授与された。在学中に、内科学や病理学をベルツに学んだ。大学時代に肺結核を発病、ベルツが治療を指導したと言

われる。

一年早い。

東京大学卒業後、一八八三年七月に公立佐賀医学校に招聘、十月十五日付をもって愛知医学校(名古屋大学医学部の前身)一等教諭、兼愛知病院(名古屋大学医学部附属病院の前身)内科医長に任じられた。

川原は、愛知医学校において、内科学、精神医学、皮膚科学、衛生学、病理学などの講義を担当した。

一八九七年(明治三十年)二月七日、肺結核の治療のため、愛知医学校教諭、愛知病院医長の職を辞し、名古屋市に川原療院を開設した。一九一八年(大正七年)一月十三日、肺結核にて死亡した。遺骸は大村木場郷(大村市須田ノ木町)に葬られた。「川原氏先祖代々墓」は川原が父忠徳の死去の際建立したもので、川原悠々の記念碑「槐かひ窓翁そう之塚」と並んでいる。

『内科彙講』発行と同じ一八九七年に、川原は「進行性延髄麻痺ノ血族的発生ノ一例」を報告した。

現在「球脊髄性筋萎縮症」または“Kennedy-Alter-Sung-syndrome”の名で知られる伴性劣性疾患の世界最初の報告であり、Kennedy et al. (1968)の発表より七十

(公立学校共済組合 東海中央病院)